

ROTARY : Making a Difference

ローター: 変化をもたらす

2017~18年度年度

国際ローター会長 Ian H.S.Risely



東京麹町ロータークラブ

50周年祝賀会まであと 336日

本日の例会プログラム

第2回例会 2017.7.10(#2171) 会場:舞の間
例会ホスト・紹介係 秋山君 会費係 澤本君
受付 佐藤君 若林君
司会者 藺君 ソングリーダー 齊藤君

卓話「五大奉仕委員長・親睦委員長・
クラブ研修リーダー所信」

前回の報告

第1回例会 2017.7.3(#2170) 会場:舞の間
例会ホスト・紹介係 荒川君 会費係 木寅君
受付 福田君 乳井君
司会者 藺君 ソングリーダー 齊藤君

卓話「三役就任挨拶・あり方検討・プログラム委員長所信」

会長報告

- 1) 第50期のスタートです。どうぞ宜しくご協力をお願い致します。本日の卓話では、会長をはじめ皆様からご挨拶を申し上げます。
- 2) 今月13日に誕生日を迎えられる、遠藤会員に傘寿のお祝いを差し上げます。療養中ですので、私がお届け致します。また、金婚式を迎えられる方は是非、お申出下さい。
- 3) 恒例の下半期入会の方で皆出席の表彰を行います。
19年:若林君、16年:久保田君、13年:金田・黒澤君、7年:濱田・佐藤・時園君、3年:保科・崎山君、2年:細谷・荘村君

幹事報告

- 1) 今年1年宜しく願い申し上げます。
- 2) 前年度皆様から、ニコニコボックスにご寄付戴いた集計を各会員にお知らせ致しました。今期も嬉しいことなどニコニコへご寄付いただけますようお願い申し上げます。
- 3) 今夕は、各委員長によるクラブ協議会が6時からございます。該当の方は時間厳守でお集まりください
- 4) 来週は前会長・幹事の慰労会が御座います。本日中に出欠をお知らせ下さい。
- 5) 今期の納涼会は7/31。ご案内を配布致しましたが、是非ご家族皆様でご参加下さい。
- 6) 上半期の会費を至急、お納めください。
- 7) 今月の福島産直品の配送日は、28日か29日です。ご協力下さい。
- 8) 例会終了後、理事会がございませう。理事の方はお残り下さい。

例会記録

会員総数 48名 出席会員数 39名
ゲスト 2名 その他 1名
ビジター 2名 事務局 2名
海外ビジター 0名 出席率 82.98%

6月12日 Make-up 後の
出席率 98.08%

ニコニコボックス

遠藤会員:傘寿のお祝いをありがとう
木元会員:会長幹事今期も宜しく。
時園会員:1年間お世話になりました。
久保田会長今年度頑張ってください!
地引会員:1年間宜しくお願ひします。
若林会員:久保田会長荘村幹事、1年間身体健全
宜しくお願ひします。
乳井会員:前期親睦委員会お世話になりました。
今期は米山委員会を宜しく。
内田会員:黒木君、ローテックス活動頑張ってください。
久保田会員:1年間宜しく。50周年を祝いましょう。
荘村会員:幹事を務めます。宜しくお願ひします
誕生日:保科会員・浅野会員・新村会員・秋山会員
夫人誕生日:内田会員・植芝会員・杉原会員
結婚記念日:秋山会員

次回予告

第3回例会 2017.7.24(#2172)
会場:舞の間
例会ホスト・紹介係 蔵本君
受付係 藤谷君 後藤君
会費係 鄭君
司会者 藺君
ソングリーダー 齊藤君

卓話「ガバナー公式訪問記念講演」

第2580地区ガバナー 吉田 雅俊氏
(東京新都心)

【今週のMU状況】

内田会員(7/5 地区委員会)
須藤会員(7/3 宮古島RC)

音楽家の処世術～時代を生き抜く彼らの素顔～

チェンバロ奏者(元 R 財団奨学生)渡邊 温子氏 (5/8 卓話)



本日は「音楽家の処世術～時代を生き抜く彼らの素顔～」と題しまして、昨年7月に出版した『古楽でめぐるヨーロッパの古都』より、「第8章 マンハイム(ドイツ)」に登場する作曲家を中心にお話をさせていただきます。

この書籍は、一章につき一つの街を取り上げ、そこで活躍した音楽家についてや、実際に音楽が演奏されていた状況について、街の社会的背景とそこに生きた人々の人間模様を織り交ぜて描いています。

クラシック音楽の中でも古い時代(中世・ルネサンス・バロック)の音楽のことを「古楽」といいます。また、作曲された当時の楽器や演奏法を使った演奏のこともまた「古楽」と呼びます。私が専門とするチェンバロは、主にバロック時代に活躍した楽器ですが、19世紀に一度歴史上から姿を消してしまったため、演奏するためには、当時の楽器を復元したのを使い、文献を読んで当時の演奏方法を探る作業が必要となります。モーツァルトのピアノ曲は現代でもよく演奏されますが、モーツァルトが生きていた時代には、チェンバロやフォルテピアノといった、現在のピアノとは異なる鍵盤楽器で演奏されていました。(図1、図2参照)



さて、本日のテーマ「音楽家の処世術」として、次の2つを挙げたいと思います。

1. 旅する人生
2. 結婚するならプリマドンナ

1. 旅する人生

現代の音楽家は演奏旅行で各地を廻りますが、飛行機も自動車もない18世紀の音楽家も実に長い距離を移動しました。旅する音楽家の筆頭に挙げられるのは、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)。彼は生涯で17回の長距離旅行をし、その積算移動距離は約18,000km、35年の生涯(のべ13,097日)のうち、旅をしていた日数は3,720日で、一生の約三分の一を旅に費やしていたこととなります。

彼の17回の長距離旅行のうち、3回目の西方の大旅行(長距離旅行の3回目)は3年半近くに及び、1763年6月9日7歳の時にザルツブルクを出発、ミュンヘン、アウクスブルク、ハイデルベルグ、マインツ、フランクフルト、ボン、ケルン(以上ドイツ)、ブリュッセル(ベルギー)、パリ(フランス)、ロンドン(イギリス)、デン・ハーグ、アムステルダム(以上オランダ)、パリ(フランス)、ジュネーヴ、チューリッヒ(以上スイス)、アウクスブルク、ミュンヘン(以上ドイツ)などを廻り、1766年11月29日10歳のときにザルツブルクに帰郷。この旅は父レオポルトがヴォルフガングとその姉ナンネルを連れ「神童お披露目旅行」で、各地の王侯貴族に天才少年ヴォルフガングを紹介することが目的でした。

また10回目のマンハイム・パリ旅行は、1777年9月23日21歳のときに出発し、1779年1月中旬に23歳で帰郷。この旅の目的は、当時ヨーロッパで最高といわれたオーケストラを擁したマンハイム宮廷に「楽長」として雇ってもらうことでしたが、その就職活動は失敗に終わったうえに、初恋と失恋・母との死別を経験した辛い旅でもありました。

モーツァルトの生涯の総移動距離(約18,000km)を、一世紀前のスペインの音楽家、ファン・グティエレス・デ・パディーリャ(1590頃-1664)と比べてみましょう。パディーリャはアンダルシア地方のカディス大聖堂の楽長で、当時の音楽家としてはなかなかの出世コースを歩んでいましたが、さらに良い待遇を求めたのか、メキシコのプエブラへと大西洋を渡りました。その移動距離は約9,000km。こうしてみると、海を渡ったわけでもないのにパディーリャの2倍ほどの距離を移動したモーツァルトには目を見張るものがあります。

ちなみにモーツァルト一家は自家用の馬車を持っていましたが、長距離移動には乗り合い馬車を使い、他人と長時間、狭い空間を共有する馬車の乗り心地は、とても良いと言えるものではなかったようです。

ではなぜ、音楽家は旅をしたのでしょうか。

17・18 世紀の音楽家には、大きく分けて 2 つのタイプがあったと思われます。一つは、仕事と演奏技術を確保するためにほぼ世襲の楽師の家に生まれ、親の仕事を受け継いである街にとどまるタイプ。もう一つは、よりよい地位と待遇を求めて都市間を移動するタイプです。大聖堂や宮廷の「楽長」や「楽師長(コンサートマスター)」といった、地位も俸給も格段に高いポストは限られていたため、特に優秀で野心的な音楽家たちはそうしたポストを得るために、遠くの街へ行くことや、国境を超えることを厭わなかったのです。

モーツァルト子供時代の神童お披露目旅行も、将来ヴォルフガングが音楽家として高い地位を得るために有力者に顔を売っておく「根回し」でした。これを仕組んだ父レオポルトにしてみれば、息子が待遇の良い地位を得れば自分の将来も安泰なわけで、マンハイムの就職活動に際しても、相当な借金をして息子と妻を旅へと送り出したことが分かっています。モーツァルトのマンハイムでの就職は叶いませんでしたが、当時の音楽家たちは、よりよい就職先のリサーチを怠らず、隙あらば少しでも待遇のよい職場に移ろうと目を光らせていました。

2. 結婚するならプリマドンナ

モーツァルトが神童お披露目旅行でマンハイムの街を訪れた時、その同じ舞台上に立ったマンハイム宮廷楽団のフルート奏者がいました。彼の名はヨハン・バティスト・ヴェンドリング(1723-1797)。彼の演奏の腕前を、モーツァルトの父レオポルトも絶賛しています。

ヴェンドリングは初め、マンハイム宮廷の主プファルツ選帝侯のフルート教師を務めていましたが、宮廷歌手でプリマドンナのドロテア・シュプーニ(1736-1811)と結婚したことが、彼の宮廷楽士としての出世に有利に働きました。当時の平均的な宮廷楽士の給料が 100~500 グルデンであったのに対し、ドロテアの給料は 1,500 グルデン、ヴェンドリング自身も 1,000 グルデンを得るようになったのです。

彼らの娘のエリーザベト・アウグステもマンハイム宮廷のプリマドンナとなりました。24 歳の若さで父と同じ 1,000 グルデンが計上され、ヴェンドリング家はマンハイム宮廷楽士一家の中で最も裕福な家族となりました。

1772 年、有名な J.S.バッハの末子のヨハン・クリスティアン・バッハ(1735-1782)が、オペラ《テミストクレス》を上演するためにマンハイムを訪れました。この時彼は、ヴェンドリング一家のもとに滞在しましたが、こともあろうにエリーザベト・アウグステに結婚を申し込み、断られてしまいました。実はこの若く美しい歌姫は 1771 年に短期間プファルツ選帝侯の愛人であったことがあり、父と同じ 1,000 グルデンという破格の給料が計上されているのはそうした訳があったからなのです。ヨハン・クリスティアン・バッハ

はのちに、ロンドン王室劇場でプリマドンナとして活躍していたイタリア人チェチリア・グラッシ(1740 頃-1782 以降)と結婚しました。

もう一人、マンハイムからは離れますが、ドレスデンでオペラ作曲家として名を馳せたヨハン・アドルフ・ハッセ(1699-1783)の例をご紹介します。彼が結婚したのは、ファウスティーナ・ボルドーニ(1697-1781)。ヨーロッパで一二を争う名プリマドンナでした。彼女はロンドン王立劇場でヘンデルのオペラに多く出演しましたが、ある日、ライヴアルのソプラノ歌手クッツォーニと舞台の上で殴り合うというスキャンダルを起こしました。それにもかかわらず彼女の人気は陰ることがなく、次シーズンも王立劇場との出演契約が更新されました。

ハッセとファウスティーナと結婚したのち、夫婦でドレスデン宮廷に出仕します。ハッセは宮廷楽長、ファウスティーナは宮廷プリマドンナとして。ファウスティーナは夫の作曲したオペラ 15 作品に出演、またドレスデンからしばしばナポリ、ヴェネツィアなどのイタリアの街々に赴きオペラに出演。多額の謝礼の支払いを受けています。

プリマドンナと結婚するメリットは何でしょうか。

18 世紀にはオペラ全盛時代となり、主役級の歌手に支払われる謝礼の額は破格でした。また作曲家としては、オペラを書いて各地で上演することが、大きなステータスとなった時代でした。作曲家は単に曲を作るだけでなく、実際に上演するまでの責任をもつ場合も多く、公演で歌ってくれる優秀な歌手をリクルートするために奔走したり、歌手それぞれの個性に合わせてアリアを書いたりすることは常識でした。プリマドンナと結婚することのメリットは、その経済力をあてにすること以上に、オペラ作曲家として少なくとも一人の主役級の歌手を確保しておけるという、実務的な面にあったといえるでしょう。

ちなみにモーツァルトがマンハイムで出会った初恋の人アロイジア・ウェーバー(1759/61-1839)は、のちにウィーンの宮廷劇場のプリマドンナとなり、恋は実らなかったものの、モーツァルトがウィーン時代に作曲したオペラに出演しています。そしてモーツァルトが結婚したのは、このプリマドンナの妹コンスタンツェでした。



参考:『古楽でめぐるヨーロッパの古都』 渡邊温子著
アルテスパブリッシング刊 2016 年

<https://artespublishing.com/shop/books/86559-143-9/>

東京麹町ロータリークラブ

設立	1968 年 6 月 17 日	〒102-0093
例会日	月曜日 12:30	千代田区平河町 1-3-8
例会場	ホテル・ニューオータニ	平河町プラザ 204 号
		TEL:03-3263-9220
会長	久保田智也	FAX:03-3263-9122
幹事	莊村 明彦	e-mail office@koujimachi-rc.jp
会報委員長	木寅 雅之	URL: www.koujimachi-rc.jp